地域での生活が困難とされた精神を病む患者と家族を支える地域看護実践上の指針
－患者と家族との対立が激化していたが地域での生活が継続できた1事例との看護過程の分析を通して－

蓮池光人（応用看護学）

【キーワーズ】　精神を病む患者，家族の支える力，地域生活支援，保健師の認識，立場の変換

本研究の目的は，地域での生活を困難とされた精神を病む患者と家族を支える地域看護実践上の指針を得ることである。 研究対象は，患者と家族との対立が激化していたが地域での生活が継続できた1事例との看護過程である。 研究方法は，地域での生活を継続するために意味があったと思われる14訪問場面21看護場面を研究素材とし，各看護場面から性質を取り出し，家族，患者の変化の特徴を明らかにした上で，看護場面の構造をとらえた。そして，患者と家族の認識と行動に変化が起きた看護場面における保健師の認識と表現の特徴を取り出した。 これらをもとに，患者の回復過程と患者と家族の変化に着目して，共通性の見られる時期ごとに区切り，保健師の認識と表現の特徴の共通性，相異性を検討し，地域での生活が困難とされた精神を病む患者と家族を支える地域看護実践上の指針を取り出し，以下の結論を得た。

《患者と家族の対立が激化しながら地域生活を送る時期を支える指針》

1　家族が患者の先行きを描けない時には，患者の回復した姿を家族が描けるように具体的に表現し，患者の存在を意識化できるように支援する。

2　家族が患者との関係にあきらめを抱いている時には，患者と家族のそれぞれの立場から，家族の働きかけの患者への効果を表現することで，家族の関わりの意味を示す。

3　家族の生活過程や患者との関係性を重ねて家族の支える力を見出し，家族が患者の立場に立ち患者の生活をふまえた関わりができるように支援する。

4　家族員の健康状態に目を向け，家族員の持つ健康障害，家族員の言動や表情の変化から認識のありようや生活のストレスを察知し，家族への看護の必要性を見出す。

5　外界を遮断している患者をアセスメントするには，家族の表現から患者と家族の状況を把握し，患者を消耗する要因を捉える。

《患者の不穏状態発現から入院に至るまでの時期を支える指針》

6　患者に不穏状態がおきた時は，落ち着いた態度を示し患者の訴えを傾聴しつつこれまでの患者の生活過程や環境の変化を重ね，不穏の原因を探り，患者の変化や消耗の程度を推測して心身の治療が必要な健康段階に達しているか探る。

7　患者の入院に直面した家族には，これまでの家族の関わりによる患者の変化を示しながら家族の関わりを意味づけ，入院後も患者を支える力が継続できるように支援する。

《患者が入院して回復過程をたどっている時期を支える指針》

8　入院中の回復期にある患者に対して，保健師も回復を支える社会資源であることを伝え，継続して支援する。

9　回復期の看護の方向性は，患者と家族それぞれの生活に着目し，患者と家族が状況に即した生活スタイルが確立できるように模索し，患者が回復への目標を持てるようになることを目指す。

10　患者の回復の程度を探るには，病状悪化時の患者の状態と現在の状態を比較し，外界の反映具合や意思疎通が可能になったかどうかを指標に持ちながら関わる。

11　回復期にある患者と家族の絆を強めるには，患者と家族それぞれの位置で思いを把握した上で，お互いの関係が良い刺激となり支え合う力となるように支援する。

12　患者と家族が安定した生活を維持できるように，

お互いの生活を大切にしながらおりあえる生活を見つけられるように支援する。

《患者の退院期を支える指針》

13　退院前の患者に対して，退院後の生活を具体的に思い描き，病状悪化につながる生活上の問題や，社会生活への不安を予測し，患者を支える社会資源の存在を示して不安が解消できるように支援する。

14　退院前の患者の家族に対して，患者と協力して患者の生活基盤を築くことへの支援を求めるとともに，家族の生活にも着目し，患者と家族の調和のとれた生活が開始できるように支援する。

15　医療スタッフとともに退院後の患者への支援の方向性を見出す時には，地域での患者と家族の生活を具体的に思い描き家族の支える力の大きさを，保健師の立場から医療スタッフに伝える。

16　退院後の患者に対しては，早期に訪問し患者の生活の変化を確認し，長期的な回復の目標とそれを達成するための短期目標を共有する。

17　退院後の患者の家族に対して，患者をこれまで支えてきたことをねぎらうとともに，今後も患者の地域での生活を支えることできるよう支援する。

地域での生活が困難とされた患者と家族を支えるためには，指針を活用しながら，患者と家族の対立が激化している時期に，家族には患者を支える力があり，絆があることを信じて，立場の変換能力を駆使しつつ，密に関わることにより，患者と家族がお互いの立場に立てるようになり，持てる力が引き出される。そして，患者，家族の持てる力が高まり支えあい生活していく時期には，患者や家族の地域生活を整える側面的援助を行っていくことにより，患者と家族が調和しつつ，地域での生活が継続されていくと見出せた。

産婦の産む力を最大限に引き出す助産師の関わり
ー分娩第1期の産婦が胎児の存在を意識できるような働きかけの意義ー

田中優子（応用看護学）

【キーワーズ】　分娩第1期，助産師の関わり，産婦の認識，胎児の存在，身体感覚

【本研究の目的】

産婦の産む力を最大限に引き出せるような助産師の援助のあり方を見出すために，助産師の関わりによって主体的に分娩に臨めるようになった看護場面における助産師の判断と援助の特徴を明らかにし，その中に「胎児の存在を意識できるような働きかけ」を行うことの意義を確認すること。

【研究対象】

助産師の働きかけによって産婦が主体的に分娩に望めるようになった自己の看護過程

【研究方法】

1　助産師の関わりによって産婦の認識が変化し主体的に分娩に取り組むことが出来た看護過程を選定し，事例ごとに助産師の援助の一まとまりの意味を持つ場面に分ける。

2　素材フォーマット「産婦の状況」「助産師の思考過程」{「助産師が捉えた対象像」（心）（身体）（社会）/ 助産師の思考・判断」}「助産師の援助」を作成し，事実を記入する。

3　分析フォーマット「産婦の変化」，「場面の性質」「助産師の判断と援助の特徴」に整理し，「産婦が胎児の存在を意識できるような働きかけ」の実践を確認する。

4　全事例の「助産師の判断と援助の特徴」を共通性，相異性の視点から整理し，分娩第1期における産婦の産む力を最大限に引き出すような助産師の判断と援助のプロセスを明らかにする。

【結果】

Ⅰ　全７事例の看護過程において「産婦が胎児の存